

# 令和4年度 園評価・関係者評価書

園名 加西市立東よつばこども園

## 1. 教育保育目標

『自分らしく！たくましく！のびのびと！』 ・健康でたくましい子 ・よく遊び思いやりのある子 ・自分の思いが表現できる子

## 2. 本年度の重点目標

認め合い・伝え合い・励まし合い・共に育ち合う子どもをめざして ～「おもしろそう」「やってみたい」「たのしい」を支える環境と援助の在り方を考える～

## 3. 自己評価結果(達成状況)【 A:達成している B:概ね達成している C:あまり達成していない D:達成していない 】

評価の観点	評価項目(取組内容)	取組(達成)の状況	評価	自己評価・改善の方策
園 運 営	○職員の資質向上 ・実戦的指導力の向上 ・計画性のある研修の実施 ○園務分掌の適切な機能と責任体制の整備	・園内研修の実施により、講師の先生の指導、助言を聞き、多様な視点から振り返ることができ、資質向上につながった。また、園内で自主的な公開保育を行い、意見交換をした。気持ちを積極的に発言し、互いの保育を高め合うことができた。 ・園外研修はオンライン、Zoom等で参加し、資質向上に向けての研修を行った。 ・園務分掌より分担制し、役割を明確にすることで責任をもって取り組めるよう見直しした。部会を適時開催し、チームで進めていくことで個人の負担軽減と業務改善を行うことにつながった。	A	・幼児理解、保育技術の向上を目的とした研修の内容を検討し、幅広い年齢での公開保育を行った。複数クラスの利点を生かし、多くの職員が交代で参観できる方法や人員配置を行いながら、専門性や個のスキルアップを図った。しかし多くの園外研修では個人の反響にとどまり、広く職員間で共有することができなかった。学びを伝え合う場やまとめたものを配布するなど工夫する必要がある。 ・情報共有にタイムラグがあった。情報伝達はしっかりと行うことと早めの要項作成と事前の提案で改善する。担任会議後の学年会議を全員でする機会を増やして方向性の確認と共通理解を図る。
教 育 課 程	○興味や関心に基づいた直接的な体験が得られる生活の工夫 ○友達と充分に関わって展開する生活の工夫 ○子どもの主体性を大切にした指導 ○子ども一人一人の発達の特性を踏まえた指導方法の工夫	・「大豆大作戦」では大豆を栽培し、枝豆を食べたり、加工して豆腐を作る体験ができた。大豆の各種や栽培方法をインターネットで検索し、栽培・収穫・豆腐作りと長期期間をかけた。興味関心を深めながら取り組むことができた。 ・年齢や発達・興味に合わせた玩具を手作りしたり、主体的に遊ぶことができる保育室の環境構成を工夫したり、一人一人の発達に応じた保育を進めていった。 ・子どもの「やってみたい」の気持ちを受け止め、積極的に取り組むことができる遊び、したいことを自分で選べる遊びが展開できるよう準備し、保育者の関わり方や援助の在り方を模索していった。	A	・年長児を中心に異年齢児も加わり、興味関心をもって遊べる環境や子どもが考え、疑問を持ったり、繰り返し遊んだり意欲をもって主体的に遊びを展開できる環境を検証し、振り返り、再構成するよう努める。 ・多くの年齢の子どもが興味を持って関わり、直接的な体験が得られる活動、自分の力でやり遂げ、達成感を感じられる遊びを追求する。 ・園全体で子どもの育ちを多面的に見ていくよう職員間の連携に重点を置く。
子 育 て 支 援	○「親と子の育ち合いの場」としての役割や機能の充実 ・未就園児や保護者への園庭開放 ・子育て相談、家庭講座等の開催 ○一時保育・預かり保育の実施	・個別懇談会や登降園時、また必要に応じて保護者と話をしたり、連絡帳を通してやり取りをしたりして、子どもの様子や成長を保護者に伝えた。また、子育ての悩みにアドバイスをしなが、保護者の不安な気持ちに寄り添った取り組みを行った。 ・こども園ウイークや随時の園見学中未就園親子に、園の様子を知ってもらうようにした。 ・園庭開放はコロナの感染状況と人員配置ができず、見合わせた。 ・途中入所、一時預かり(産前産後)の利用の方が多く、可能な限り積極的に受け入れた。	C	・保護者の悩みに寄り添い、不安や疑問に応じるように努めたが、保護者アンケートから不信感を募らせることになった原因を探り、対応について話し合い、改善する。 ・預かり保育も多し、保護者と関わりが持たにくい状況もある。個別懇談会の時間を長くする又は回数を増やすなど改善が必要である。 ・園庭開放が再開できるよう担当者を中心に対応にあたる。更には外部の力も借りて子育て相談、園庭開放を進めることも考える。
安 全 管 理 保 健 管 理	○園舎の安全安心確保 ・園舎や遊具の安全点検及び管理 ○職員の安全管理能力の向上 ・危機管理マニュアルの周知徹底と活用 ・防犯、防災訓練の実施 ○交通安全指導の推進 ○健康観察、疾病予防、健康診断の実施	・毎月の火災・地震・不審者などあらゆる場面を想定した避難訓練を実施した。毎回振り返りをし、課題を出し合い、次の訓練に生かすようにしていった。また、園内安全点検を行い、ケガや誤飲のない安全な保育環境を意識した。 ・心肺蘇生、AEDについての講習会を開催し、消防署職員より指導を受けた。 ・交通安全教室の開催。 ・健康観察で体調の変化を早期発見し、体調管理に努めた。感染症や流行時の対応について保護者に周知した。12月コロナが流行し、感染拡大防止の為学級閉鎖措置をとった。	B	・避難訓練は何度実施しても毎回反省点が出る。未告知の突発的な訓練も随時取り入れ、子どもの命を守るため、繰り返しの訓練と反省で、冷静に判断し、行動できるような危機管理意識を高めていく必要がある。特に戸外遊びでの職員の立ち位置や配置など意識し、職員間で連携を取りながら安全確保にあたる。 ・感染拡大防止に向けた対策の再確認や園舎内や遊具の安全管理は全職員で行うことが大切である。
道 徳 ・ 人 権 教 育	○子どもの体験や経験を通した、人権意識や道徳性の芽生えの育成 ・命の大切さに触れる体験の重視 ・思いやりの心を育む環境の工夫 ・豊かな感性、様々な気づきを育む環境の工夫	・園庭の草花や野菜の栽培、虫など生き物の成長の過程に触れ、世話をする環境を作り、命の大切さに触れる体験を多く持った。 ・子ども同士トラブルや友達で困っている場面を適宜捉え、言葉遣いや行動について相手の立場になって考える指導を行った。 ・不適切な保育がないようアンケートを実施し、自身の保育を振り返った。 ・異年齢児と一緒に遊んだり、活動したりして優しさや思いやり、あこがれの気持ちを持って関わる機会を設けた。	B	・仲間意識が芽生え、相手を思いやる心や自尊感情を育むことができるよう指導を工夫する。 ・子どもや保護者の前では常に正しい言葉遣いで、声の掛け方、立ち居振る舞いなど意識し、丁寧に対応していくことを心掛ける。 ・交流が深まるよう時間の確保や内容を職員間で共有し、出来ることを出来る形で模索し、計画する。
特 別 支 援 教 育	○一人一人の特性や発達課題に応じた支援 ○専門医療、教育機関との連携 ○途切れない支援の推進 ・家庭との連携 ・小学校との連携	・支援部会を開催し、一人一人の支援の方向性や手立てについて検討し、子どもの特性に応じた関わり方や行事の参加の方法など話し合いを重ねた。一人一人の特性や発達課題に着目し、個別の発達支援ファイルを作成した。 ・支援児の動画を観ながら専門の先生に助言をいただいた。 ・園訪問や学習会など専門機関と連携を取り、指導・助言を受けた。	B	・支援部会だけでなく、多くの職員との話し合いを可能にし、幅広い見方で支援の方法を探っていくことが大切である。また、専門の先生からアドバイスをもらう機会を多く持ち、療育専門機関とも連携しながら、途切れることなく次年度の支援の充実を図る。
家 庭 ・ 地 域 ・ 他 校 種 と の 連 携	○信頼される園づくり ・情報の発信、受信 ○園行事への積極的な参加の推進 ○地域の特性に根ざした園づくり ・教育資源の活用(文化・人材・施設・自然) ○こども園・小学校・中学校との連携 ・互いの学びの場となる計画的な交流	・コロナの感染状況を見て、感染対策に配慮しながら慎重に園行事開催ができた。保護者に園行事参加を進め、園生活や遊びの姿など知らえる機会を多く持つことができた。(運動会・家庭教育講座・よつばフェスティバル・生活発表会など) ・「やってみよう！よつばタイム」では地域の外部講師を招き、茶道、和太鼓、音楽など5歳児がやってみたい活動を選び、1年間を通じて文化芸術に触れる機会を持った。 ・4小学校と連携し、プール遊び、共同活動・授業見学など小学校へ行って体験した。更に11月にも交流活動を持つことができた。幼小職員研修ではこども園の遊びや学びについて研修を行う予定であったが、コロナ感染拡大により、中止となった。	B	・園だけではできない様々な文化に触れる貴重な経験を今後も継続する。開催にあたっては計画、打合せを綿密に行い、異年齢にも披露する形を模索する。 ・園だけでなく、クラスだより、よつばだよりを発行し、保育方針や子どもの様子をわかりやすく伝え、情報発信に努める。又、日頃の姿をビデオに録ったものを見せよう参観方法やネット配信するなど視覚的に伝える方法を検討する。 ・小学校との交流や職員研修を双方一緒に計画し、子どもの育ちをつなげていくよう努力する。

## 4. 自己評価方法の適切さについての関係者評価

・改善の方策は妥当。自己評価は日や月があるが、限りなく近いものだ。子どもにとって本当により環境であり、いつまでも、元気に挨拶してくれ、楽しい環境で子ども達も自分もそう感じている。協同体験、葛藤体験などいろいろな経験をし、子どもたちの成長が見て取れる。よい保育をしている。今後益々よくなっていくためにも頑張ってもらいたい。保護者アンケートの回収率が低いように思うが、アンケートに書くようになるような、興味を持ってもらえるような前置きや必要性に触れ、回収率向上につなげていくよう検討を望む。

## 5. 評価の観点ごとの関係者評価

園自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
・方策の具体的な方策を今後、皆で考える時間を作っていくことが必要である。 ・全体とする研修、少人数とする研修など形態や時間、内容を考えて、効率的に進めていけるよう工夫が必要だ。事前に課題をもって集まる。時間を決めて行うなど、限られた時間で研修を深めていく方法を検討していくことが大切である。外部研修が少なくなってきた状況ならなおさら、園内研修として職員の底上げをしていく、レベルアップしていく機会を作り、保育や先生の質を磨きあげていくことが大切である。ベテランの先生が伝える、資料を配布するなど若い先生も力を付けていく方法を探っていくて欲しい。
・「大豆大作戦」のように栽培から食につながっている経験は大切でとてもいい経験だ。小学3年生の単元にも大豆栽培のことがでてくる。自分が経験したこと、実体験から学んだことを活かして、また違った観点から学習を進めていくことにつながる。興味関心をもって関われること、実体験できることを保育に取り入れることはこの時期大事なことである。 ・運動会を観てもらえない経験も積んでいると感じる。いい設備、いい関わりのもと自分も頑張ろうと意欲を出す姿があり、伸び伸びと活動していた。友達同士教え合う機会もあったら。値打ちのあることでも元氣にこれからも続けていってもらいたい。
・子育て支援、園庭開放については、目的もあると思う。お互いにとっていい形で、時期や形態を考えて実施されたい。 ・保護者対応は本当に難しいことだが、いろいろな保護者がいる。同じことを話していても、いろいろな捉え方がある。子ども同様で、保護者の様子を見極めて一人一人に対応した話し方、違う対応が求められる。保護者もいろいろな経験して成長していくものだ。保護者に応じた対応で子どもの成長を伝えていくようにしてもらいたい。
・毎回反省点が出るということは先生たちが問題意識、課題意識をもっているからこそ出てくることだ。だからこそ、毎回向上して行ける。良かった点も共有し合えるようにし、向上につなげていく。訓練は差し迫った状況の中で対応していくために行うものである。子どもに恐怖感を与える訓練は行けない。子どもは先生の声聞いて行動する。先生は職員研修の中で実際に警察と連携し、いざという時に備えることがあってほしい。1回で身に付くものではないので、繰り返し子どもも先生も訓練していくことが大切である。 ・園の安全管理は全職員で、又、回数を確保し、しっかり行うことが大切だ。意外なところで落とし穴がある。保護者は安心安全な園環境で暮らせることを望んでいる。
・自己研修、自己研鑽に励み、真摯に向き合えるよう努力していつてもらいたい。職員一人一人が課題意識をもつこと、課題を課題として捉えていくことが必要である。
・一人一人に寄り添い、向き合う保育の中、真剣に向き合えば向き合うほど課題も出てくるだろう。一人一人をどうまで見ていくか、先生の力量が問われる。職員が課題意識を捉えていくことが大切だ。
・幼小連携において小学校の教育過程、カリキュラムを知った上でこども園で経験することが大事。園で学んだこと、成長したことを小学校へ発信していく、お互いの保育内容、教育内容を連携していくことが子どもの成長には大切なことである。 ・子どもの声だけでなく園の様子もわかりにくく、また、1か月に1度のクラスだよりとなると情報が後から来ることになる。「今週の5歳児」というようにYouTube等で配信があると保護者は嬉しいと思う。また、クラスだよりも手の込んだものではなく、その日の運搬など小さくてすぐ読める物。たくさん読まなくていい物。保護者の理解を得られる工夫をしていく、今の時代の保護者に合った形を模索することも必要である。